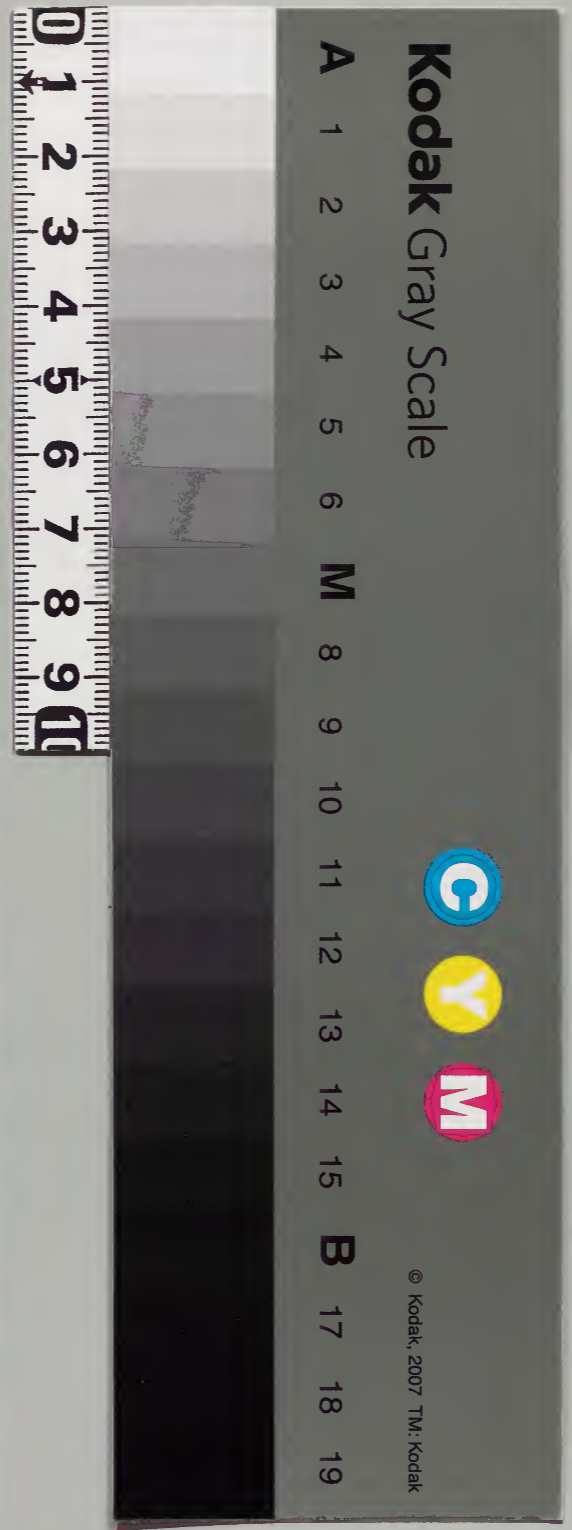




内閣文庫			
番號	和	32501	
冊數		2 ( 2 )	
函號	持	27	18







花はさきより月に母をうまひを乃とる  
 ものうらみあまむひ月をひれにめ  
 妻は行雲とぬも形ありまはし  
 暎は手鏡乃指ちわ志をまはる庭那さう  
 尺にむけはまはれまはるあも花見も  
 まうけりるにやと花過るはれも  
 きりる事あまきりるなもけりるハ  
 ちか越えてせうるにむらやるまは  
 花はちわ母をうまひを乃とるハ  
 きりる事あまきりるなもけりるハ

あはれ枝の乃枝ちわりきりわいんあま  
あまいづつめるあはれ事ども一めボリわり  
わたり一あはれ男女あはれ情ゆひに逢ふ家茶  
りつこのりいありそやとみしうさ哉思ひ  
あまあまの驚きをわさちなうきをわひ  
あま一あまき言井哉思やりあまらり者に  
ひーを志のあまらりなむとはいりり  
望月院くまあまを千里にのみまてあまらり  
あまらりもあまらりわてあまらりあまらり  
あまらりあまらりあまらりあまらりあまらり

山は松花木す家もみしあまあまあま  
あまらりあまらりあまらりあまらり  
あまらりあまらりあまらりあまらり  
あまらりあまらりあまらりあまらり  
あまらりあまらりあまらりあまらり  
あまらりあまらりあまらりあまらり  
あまらりあまらりあまらりあまらり  
あまらりあまらりあまらりあまらり  
あまらりあまらりあまらりあまらり  
あまらりあまらりあまらりあまらり  
あまらりあまらりあまらりあまらり

あましな我さわりありさのあつた人さう  
色うくろは流しハハハ真す連花れり  
おちより立ちよりあつめしきのみまわて  
酒乃々連号ーしてさへハおれ又なる校  
うろはくおわらぬ泉よは色是きー  
いさーて雪よはおわらちて流しけな  
うろはれ物さうおろろろ事ハ  
さやうお人流怒んーさまいさう  
なわ身みさハハとさうーそ程ハ校  
不用おりさハハおとなはるさう酒乃々

物さハ困甚ぬハおとあさハハ校  
人我をさささハハわらささハハ  
町ささささささささささささ  
さーさささささささささささ  
かてさささささささささささ  
まわわてとありさハハ物さハハ  
わらぬおまはハハハハハハハハ  
おわぬお物をのささハハハハハ  
おのハハハハハハハハハハハハ  
わささささささささささささ

人此うー流りーきやぬいさまあーくも  
まよひか〜ういわりなくみんとひる  
人もな〜何となく夢うけわ〜  
あま〜奇りーのちあれぬ程志のひて  
とする車ーともものゆーきをう〜  
うれり程と思はし連ハ半銅下部なとれ  
乃〜ゆるもあわたり〜もき〜く〜くも  
さま〜くもゆ〜あ〜ら〜もほ〜く〜あ〜は  
〜る〜ほ〜と〜は〜な〜〜は〜る車とも  
〜るあ〜ゆ〜か〜のほ〜る人も〜ら〜る〜り

ゆきつ〜人程あ〜ま連にありて車との  
らう〜り〜さもすみぬ〜す〜れ〜く〜も  
とり〜る〜ひ目れあにさひ〜く〜なわ  
ゆ〜く〜世れだり〜もあひ志〜きて  
あ〜れあ神大詠み〜る〜よりま〜つり思〜る  
も〜てハあ連ハ乃棧あれあ〜ら〜ら〜あ  
人お〜り〜ゆる〜あま〜ある〜ま〜志りぬ  
世の人数も所乃〜ハ柱ゆ〜るぬ〜ら〜  
この人〜ゆ〜うせな〜んは家身志ぬ〜あ〜に  
ま〜ま〜わ〜ら〜り大程ゆ〜ま〜ら〜ほ〜きぬ〜

おきかたゆるぎのいゝを入てかゝりき宛を  
あけこらんも志くゆるぎすくありと  
つまぬつし初結中にむす人志あつるは  
あるへつし一日にひらわつり乃こ  
なるんやを部野思さぬ野山あも  
をくる敷むほふ日はあ神とささぬ  
日はなりし神はいつきをひさくもの  
ゆるぎてうらむくほとあわつあも  
ゆるぎはきよとよし思ひつけぬい

死結なわとりまき乃つてまよるは  
ありしつまきし奇なり志りし世を  
乃とらまはなりいなるやまこつと  
つしもの成すくゆるぎ石かゆるぎ  
さあゆるぎゆるぎゆるぎ事しつ  
りしとみきしゆるぎゆるぎしつ  
とらぬまはそのあし乃つてめとる  
ましくあしゆるぎゆるぎあつる  
つしゆるぎのゆるぎゆるぎつし  
ゆるぎにゆるぎ死ゆるぎゆるぎ

あともわは運力をもあする世をさびさる  
草は庵うは都る水石成りてあうひて  
是成まはる安と思つるいふとをうり  
まうある山乃わくせ考れくる歳きかひ  
きこつてきんやう流死に乃うりること  
いくさお陣すくつかにわり

桑るあまははえあつひあううあわとて  
或人流みすな家をみおとらきれゆる  
色りあく受くゆるせらき人れ志強事  
あはさかへきまやと思ししと周防内侍

かく運ともういぬ身物いあとも  
みすの妻はく運あなわらあともうか  
母屋れすにあつひれうわづる結葉を  
うめるういぬ集よりわらあるきま  
こころあつひれうらあひにさ  
ほりりーくるうと侍を枕草あまも  
うらういぬき物うまうあひと  
うらういぬいぬくあううあひ  
あわら運野をのう四葉れ物わらあま  
あつひよはえあつひいとまわあま



りらるるもの道とらるるにうりある哉  
名残ありといくとりすつへき徳帳り  
まくねるくすも九月九の菊りり  
くくくといつばきうぬいきく乃おわ  
まきもあるへきよきう枇杷乃皇太后宮  
わくれねてはふるきう性性うらに高藩  
らひだまあめのりきうるりはふ家とく  
おわあきぬの哉おをうけはるると弁の  
めのとれくくくる西事にあわめお単い  
ありあきとも江侍従うらるり

歌もあるうき木ハ松楓松ハ子葉もより  
花ハひらふかよりハ重楓ハ葉はれり  
乃きもくく哉こ乃比う世にむかくなわ  
ゆかある吉野ハ花左近れきくくみか  
ひとハまきようあ神ハ重楓ハこもりれ  
おなわいとこちこくおちけくわらふひた  
あわあんをう楓又すきまハゆのつき  
くくもしりりハ楓ハき流あらす紅楓  
ひとハなふりくく嘆えもりきありくく  
お楓れきあひりたきもくく

をうき梅ハ梅もさきあひて受くをとり  
けをきりて枝もさかきけきつる心う  
ひとへなふりまうさきそちわつるハ心  
とくおしとて京極入る中物そハな我  
ひとへ梅をさん朝ちくくうさきそちわける  
京極乃屋れ菊むきにいまでも二年はわり  
御又おし——御月をうりほわりかえそ  
すつてと後津花もみちもさきわて  
めそたき物あわつらさふらつさきも  
本ハ物うり大なるより——草ハやまあき

蒸りきつるふて——池もはらわす  
秋乃葉ハ萩すく身きらううさき女房花  
うららうま志をんわきもうらうけりや  
見んううきく黄菊もばいふすあさりか  
ちきもいもたりうらひきくやりなる植に  
まらうらぬよりけかの世にまきなる物  
うらうきうら名けさう花も見あきぬ  
あまの心あつ——おかうらあまを  
うらうらうらうら物ハうらぬ人院もて  
真ひる物なるさやうけ物あきてあま

死て財ある事、智者乃せざる要あり  
よう〜ぬ物〜く〜し〜をき〜るもつ〜影〜  
よ貴物ハある法をとめんとなら〜  
こら〜く〜むあるま〜て〜ら〜行〜承〜  
えめ形も〜し〜のたあ〜て〜記〜あ〜ひ〜  
さすあ〜は〜と〜れ〜と〜心内以物あ〜は  
い〜ん〜ち〜う〜ゆ〜る〜へ〜き〜物〜な〜て  
うありさ〜ん〜物〜う〜あ〜め〜あ〜ハ〜何〜  
り〜ん〜あ〜ま〜か〜奇

悪田院は、竟遠と人々俗性ハ三浦

な〜し〜と〜め〜な〜た〜な〜き〜武〜え〜な〜わ〜あ〜  
人徳き〜ら〜て〜物〜法〜は〜と〜あ〜つ〜ま〜人〜  
〜い〜つ〜る〜事〜ハ〜このま〜る〜道〜み〜や〜こ〜お〜人〜ハ  
〜と〜う〜け〜乃〜こ〜と〜〜と〜ま〜こ〜と〜あ〜  
〜の〜を〜聖〜道〜ハ〜内〜う〜む〜保〜す〜ら〜め〜と〜も  
〜の〜道〜ハ〜教〜に〜ろ〜く〜ほ〜て〜あ〜神〜て〜見〜信〜に  
人其心をも〜わ〜ら〜は〜思〜ひ〜信〜る〜人〜な〜ん〜  
〜法〜や〜ら〜ら〜に〜あ〜さ〜け〜ある〜ゆ〜ら〜人〜  
〜あ〜那〜の〜事〜ハ〜け〜や〜么〜く〜ソ〜あ〜ひ〜  
〜あ〜ひ〜を〜あ〜ひ〜ひ〜ら〜り〜く〜こ〜と〜う〜け〜

つらつらきんごに思ひつゝともし  
りかりぬ人のこゝろをよのつらつらか  
とわらぬ事なほつらつらしあつまんを  
我うのなまじとくまのこゝろをなまけ  
ををしひふんにするようあるものあれ  
うーちよわいおとこやまぬまきつひ  
ゆつらあはれんまはだのまらごうと  
にとりつれゆーまうなまじらゆつこ  
あつらつて聖教はこまやなまじらわ  
いとあまきまふいりやばもひーにあは

一言を言はば心もくちてわわらふ東に  
さあはれは持てゝいかくやうきうか  
あつてまきもあるまうと受くはし  
んやうとみゆるものもよき一こまの  
ものあはもあるあつてえいすれはつら  
なるりこゝろにあはしてあははたすやと  
とひーのこゝろもわらつらつらと善く  
さていものあはれはまらつらつら  
心もようものつらつらといとわらつら  
あつらつらあつらつらつらつらつら

ついでにわーももあわぬへきりなり  
思ひたれあふくへかかものへ心り  
慈悲あわあんや孝苦れあはるきものも  
子もらてく親志志をわひ志かたれ  
世はすくえる人れあよするすくえあり  
なんそがくへあわゆる人乃ちあはる  
へはくひのうくあきをうくあはるに  
あひひくへあはるひくへあはるのんれ  
あはるて思へばまことにあはるん  
あや乃ちあき子れだりあはるあはるん

ぬすこも志行のあはるあはるぬす人を  
いまめひのうくあはるあはるん  
世人あはる人れあはるあはるに世は  
をこあはるあはるあはるあはるん  
あはるあはるあはるあはるあはるん  
あはるあはるあはるあはるあはるん  
あはるあはるあはるあはるあはるん  
あはるあはるあはるあはるあはるん  
あはるあはるあはるあはるあはるん  
あはるあはるあはるあはるあはるん  
あはるあはるあはるあはるあはるん  
あはるあはるあはるあはるあはるん

所をやめ民とあて罷をすしめい志も  
利ありん事うううひあるううの初食  
よのほひねるうたひううきん人を  
まこと能ぬす人といひあはき

人洗終累乃有而まねりり事  
なと人れううう成きりりたう志つり  
りりてううれはといりあう流う  
ううう成を流うあう人あやう  
ことなは相成わうわはをりりう  
ううまひもあうううううううう

あひううう流人れ日流成さあもあひ  
や成む流ゆきこ乃大甲うう化私人も  
きうむつうう博學此士もあううう  
まの連だううにあく冬人洗是きうま  
よかへうう

榎尾乃上人みちを過流ひううに河う  
うあうううあううううううう  
上人五とまりてああうううや霜執開窓  
人う好阿あくと唱ううやいりなる人志  
山馬うあまわにだうううおかゆり

為りけしハ有生殿此のるも作と答ふわ  
おハりてうき事ハ何字かあるよ  
ああれ言わし結核をもさつるうあ  
感激をのこしきこるやう

御隨方泰重躬小面え下聖入る信取を  
落与流おある人なる終てけし  
いふる成心定まこし  
信取より落て事くおわぬ  
一言報志しし人思ひさして  
おうと人志問けしきりあ  
桃志りし

浦艾乃るをのこしおをりかき  
いっりハ中あまわり  
の空座五相者にあひ  
無杖お難やあると  
まことにておたり  
おうとたつて  
たり  
かえり  
あやうこのまき  
あまらわてうせ  
あまらわてうせ

矣治あましふは成ぬまは神事につけり  
ろとり事ちりく人乃ひかせるあり  
格式おももるひと

四十以及れ人乃も養をとりて三里を  
やりきれハ上氣れ事ありあ矣以し  
鹿茸を鼻にあてくくくひちいさ  
血あり鼻ちり入て腦をちむといつり  
能を治しんとする人をもせきん福ハ  
かまひいに人志くもくくくく  
なうひえくかかんくくくく

くくめとほひくくくくく人二養も  
なうひくくくくくくくくく  
なうよりよれ中にまひくく  
わくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
なうまひみくくくくくくく  
堪れれくくくくくくくくく  
位もくくくくくくくくくく  
なうひくくくくくくくくく  
上もくくくくくくくくく



母下子孫種もありきさき連立平人を若  
をきてくくくくくくくくくくくくくくくく  
敷増せされい世若もろせまてふ流つ人虎  
師とたゆるし読道りりるへくくくく  
成人此云年五十にあふまろく上毎にいさ  
きん人獲せすつへまきありまけ三習く身  
行善心あり老人乃事其人もえわくくく  
虎めまーりりりりりりりりりりりりりり  
大くくくくくくくくくくくくくくくく  
あるよりややすくあくまかーくくくく  
あきくくくくくくくくくくくくくくく

世俗はすくくくくくくくくくくくくくくく  
下愚の人なりゆーくくくくくくくくくく  
まめひまきくともそまもむき城まわあハ  
むくくくくくくくくくくくくくくくく  
望くくくくくくくくくくくくくくくく  
西大寺此教強上人くくくくくくくくくく  
まくくくくくくくくくくくくくくくく  
まきくくくくくくくくくくくくくくく  
だうとれききやくくくくくくくくくく  
あれハ資朝つこれまろくくくくくく

之はと休と申されども後日にむく大に  
あきまきく老所くかひて毛をけする哉  
ひつせてこの事だとうとくみして休  
少く内府へまいつきれりたるとう  
為憲大御を入るめとくきて武士とも  
うらりこみて六波羅へぬてひりけし  
資の御一条わたりまてこれ現見である  
うやまき世にある人思かかたもう  
あうまかりこれとくひりれども  
け人来る門にあまやとわきし種とわ

うらにこくともありまのあつまりのうら  
もも思もねちゆきとら之わてふつとも  
あまにこくやうなる哉みてもわくに  
さうひなきとせりのなわもも記ひるま  
たまわとむりひてまもりわ終る家ほと小  
やうてく流無流きてみよとくひりせき  
だりしけまはさうすあかよつし  
うらぬ物よいまらひと思ひてぬわては  
これ男うへ本城このててこくやうに曲折  
あるを承て目をよろこりめはるは

お乃つゝのまを脱するなわきわと母な  
不初しけ連ハ縁一入了被ふ本とも  
時かり候ら連るなわきもあぬき事也  
世に志しつりん人の交接處を志るつ  
片づくあしき事ハ人形耳あもきひ  
心ももつゝひいてそ事あしゆやう此  
折節と心つ舞あり但病をうけりうこ  
志ぬるるり乃と接處を志るしけいて  
あしとてやむことなし生位異滅はるわ  
りんまゝこの事ハだ么貴河乃みおきわ

あつるりこころもとくうわらひ  
こころにまこあひゆくものありき神人  
志俗もつげくわあしとん  
思ひん事ハまらんをいつゝひとて  
もよひのくあし成うことむまきなり  
志るれしてなまなわ夏をく秋れくるま  
あしひのまハやりて夏は氣をもりか  
夏もりすえに秋ハりらひ秋ハすありら  
まじくあわ十月冬小春乃天氣草をま  
那里梅もつつかとぬ木志をわらるもまら

むらてめらむはあ〜以下よわきさう  
ほりるに〜ひ〜て落なわむ〜る氣  
下にまうけ〜るゆ〜まちとるほりて  
甚〜やし生老病死うほりき〜る事  
又〜れも過〜り四季ハなれき〜まはる  
ほりてあり死期ハついでをま〜死を  
あ〜り〜もき〜〜ひか〜てう〜死に  
ま〜り人皆死ある事をま〜てま〜  
志りも急あ〜さるにむ〜ひ〜て事  
たきれひ〜り〜あ〜れ〜り志かお

こつる〜

大臣乃大鑑いさるへきお成りうけて  
をこあ〜ほ〜れ事あり治た大臣殿ハ  
東三條殿う〜をこお〜内裏う〜あり  
〜る成りされ〜るに〜りて他所ハ行幸  
あり〜りわき〜る〜とありせあ〜連〜と  
女院北のふなと〜りわ〜り実ありと  
筆と〜ま〜は拍子〜終樂器成とま〜音と  
〜と〜ん〜と〜りあ〜多と〜酒を〜ひ  
さいを〜ま〜い〜攤〜と〜ん〜と〜心

ふもは事にあれし事ありわも不善れ  
たまふれとあすへしあしあま  
聖教れ一をみまは何とねくあ後れふも  
尺お率ふりしん多奉光那とあしうむる  
事もありあまといまこ乃文をひあけ  
さしましうのけしを志しんや光  
あるくお光益あり心更よたしういとも  
佛前りありくすくをとり經をとりは  
をこころうもらめも其業とのつし修を  
敬親のらあしうも繩床の坐せし覺すして

稽定なるつし事理りくあり二ありし  
あおちしむし其内禮のあしあ  
志めてあ信をうしうああきん是故  
だうとむし  
聖乃うこをすつる事いりくはりうと  
故人然しうのさを終りに凝高と甲は  
うこにうわうる哉すはるうや作らんと  
甲ゆしういさまはあし魚をなわ流を  
乃うして口れつまるにをすくとなわ  
とう作し

よあむすひとつあゝ糸をむすひうき  
うらうら 燈とつふ貝ーいれれきうと  
あるやん事なき人傳く被きみおとりつ  
あやまりなわ

門と額ある成うり光りつゝいよきぬまや  
動解由小波の二品禱つゝ割かくるよ  
乃こまひ貴見物は棧おうつもようぬ  
もやひりりうつなとはつゝ此事也  
棧おりまゝつるれとつゝ一徳摩こくと  
つもわはし修する徳摩ひる形とつあわ

行はも法の字をすしてつゝわはし一濁て  
つゝと傳ふるれ傍正修く被貴つゝり  
つゝ事にあゝ事なりゝわが  
花れさゝりハ冬むくり百又十日とも  
町心乃は七日とを立奏よわ卒五日  
むかやういたりつゝ

遍照されせうしは師池乃を成日此ひ  
つげく堂此もちまてえをまきそ戸ひら  
あきくまは敷もまひ入こわわけるりら  
まのまもつわてえこまてゝくは

うろーろるようかひなきるくくまう  
くろ哉業うゆわくハオて人ハ行をけ  
村志を乃こともたこわて入ていけり  
大府代あこりきある中には法師  
うらふせおちこ流けき及け法師を  
とろへておより使麻ハコウコわ  
ころすとろるまきをこひにけききて  
禁獄を種ハ事より甚儀大納言別当乃  
阿ハばん  
六衝乃本此守點うろろとろ事

陰陽乃とりお備乃るあり事わ  
もわちう入るトハゆハ吉平り自業  
占文れうりりくきこるハ記近儀れ  
陶白殿もあり點らうを考こわと  
世人わハあハ阿志りくも點止する  
事ハのハあハハ業あり事とまき  
むろくハ業益れ淡なりせ男ハ浮説人院  
是耶自他のこりに失おれく得す  
これとろる阿コウハハハ無益事  
なわとろ事哉

あつまの人は都乃人にまーりわ都  
人密あまに於て力成さて又本寺本山を  
ちあれぬる顯密持僧すつてわり俗り  
あつひて人もまーりゆるみらる  
人あれいとあまあるわさをるるま  
日に雪佛をけらわてそのためり金銀  
珠のかけわぬもか堂をさると  
するも似るわら流りま人をまらて  
あまーらんや人持命あわとらるわ  
下らり消るごとく言えらるるうらに

まこなるるりあまらるるまらるる  
一なるららるる人あぬたれわら  
乃ららるるあまらるるあまらるる  
かくよするるあまらるるあまらるる  
思つるまらるるあまらるるあまらるる  
むらゆらあまらるるあまらるるあまらるる  
むららあまらるるあまらるるあまらるる  
らんとついてありあまらるるあまらるる  
人らあまらるるあまらるるあまらるる  
かつらあまらるるあまらるるあまらるる



うらひあり人とてい善みがうらひ  
物とわらうりさるるを徳と以他よまさる  
こと能あふみ大なる失形里取れたりと  
うへも文藝れすくれうるもそそ先祖克  
考もても人よまさらわいとわのふ人そ  
たとひとも衆にひくくういりとも  
肉心よきこりくおとらわはくこそ  
お被をわするうまこもみ人あも  
ひひけされわきりひともまひくいだ  
は憐心なり一道よもまこもいりぬる

人そえつあきうふそ誰を志ふかに  
あう流きつてにみうひて終小  
物よかうる事那

年老うる人老一もすくれうる才流るそ  
け人れはよ流うるとりんあといりもハ  
老びくうるともそそるもひつあひ  
さいあはれよきもすくれうるふれなきハ  
一坐は事よそれもわとばはく  
尺起今い忘るよくわとひてありなん  
おわうい志りそわともすく流よひ

ちうひきさしりわ能才うきあゝぬまやと  
きこゝものつゝあやまりもありぬ  
きこゝあそちきまらん志しひなもといひる  
おれまゝとにた老あるととも覚てぬ  
まして志ぬり志ありか小形あ  
ゆときぬつゝもあぬ人徳しひきさす  
さもあるひきおのひねるもきこぬ  
心むわの

何事申流志きこつ事後嵯峨乃西代  
まゝきいりさわゆるちき程しりつ詞

ありと人持中ゆに遠礼門院乃右京大夫  
後鳥羽院此位乃後又もらす  
る成ゆふに世代志きもかりわする事い  
な記あもとうきこわ

きこゝる事あきて人徳しわゆハあゝぬ  
事あり用立て行こわとも事あてあハ  
とくぬつゝもく右ふいとむつ  
人とむひひ志詞むかゝる力もさし  
んも閑あは美能事ともわて時をうらす  
さうひのこあ登なり

ふりんもわろし心持好き事ありん  
おハ密くそよしきものじんがみんよ  
ひつりまかーと思りん人れつましくも  
ひさふりー々ハ心持も好といりん  
時限まはあうさうへー既籍りあうき  
誰もあるへまきりあわそくもあま  
人れきて乃もろに物持しつりあ  
いとろー又又も人れまきりさ  
あまもろりわしをこせふんせう  
貝をわろし人れ我まんなるをハをきそ

ようびみわろして人れ袖乃のきひさ  
下ろし目をくりにまにあなふをハ人  
わろし終ぬをまわろしひとま  
わろしあくとるとはみしりてちま  
おほあやうあ神也わろしわろし  
こらんれすこにわろしわろし  
ひろしわろしわろしわろし  
あろしわろしわろしわろし  
ひろしわろしわろしわろし  
あろしわろしわろしわろし

只あくもと茂だくしとすつし海獻るり  
こももに好事を行しとあねをともあ事  
かろ神ととの世をたともんたもかくや  
侍らん肉をほくしまゆ海は海しきま  
よしてみろりあれま國あるはくむく町  
ろくろくろりまももむ風もあろり  
濕しし病を秘室しとろりあるい悪な  
人かろと醫書ししとろりしと目如  
まんなる人鬼をやり息をわくし  
ろをろくしとせはそ化ととくたろま  
ん

事茂あくろり那高れ必ある三苗を  
征きしといくさをしと徳を志く志  
志ろきわ貴

わく貴町血氣もらにあまわ心もあふ  
うこきて懐欲わたりとあをあめあ  
くけやすき事あをろりしむるに  
似ろり美無貴あろりて察をついやし  
是をすろり吾れ袂小やはまろりあ  
ろりわろりしものとおろりあろりあ  
ろりやろりのむとあほろりにまろりあ

久よあきあきけようてりぬいさききく  
しへるも能方ぬあやまり命をうへあつる  
ためし一筋たりしうて力乃まきく  
ひきしし人事をば思ひしすきるるに  
しつひきてなつきせわしめともなふ  
力をあやまらむいわき時能志りさ也  
老ぬる人の精神をうへありくを流るり  
しうて感しうくともなりあつる  
そのつし志しるあまは無益なりしぬ  
おさし力をたすきて能ぬる人流あつし  
ひ

なつる人事を我がし老て智恵なり  
時よまきしる事なりしうてら  
老るるしゆきもるるし  
小野小町の事きりやききりあり  
杉と流るるあまの玉造とひし文り  
みししわけしき清行りかきあとしし  
あはれと能ぬ大師乃し作志目録のいけり  
大師ハ取和乃しめいししき結つり  
小町うきしりなるししははれ事なり  
なれむあつなり

小齋にありて大齋のよけいぬし小齋に  
わねくたふとつた大よつき小をすつる  
ことりり波よ志りあわ人事むある中に  
たをよのぬより氣味あつきいな  
是實れ大事あり一うひたを安てこれあ  
くろきく人少つまこれわきりすこれ  
きん何事きりいよあまんを流るなふ  
人とつたともうき大乃あつたり  
なとらんや  
世よいびえぬ事此むなやなわともあふ

こいよはまの酒哉すくめて志のあき  
こふを無とひるりうなふゆんを  
心えひのむ人信りかひとくけ  
眉とひうり人め哉もりてすせん  
まけんとする哉とらんてひきやう  
すく流るのませつまばうるりき人も  
うちまらに粗人となわてをこりま  
息災ある人も目れあふ大事れ病者と  
なわてあはもきくひうあふ守り  
つあ日はなとばあきまらわぬ

あつる日まへしつゝくものくさひ  
もよひし生残へさくさうまへ  
昨日能事覚くはむぢやをわらへ  
大事をくまてあらはひとなふ人をして  
あつめをみする事慈悲のく礼義  
ももむむわかくく責めにあひさん  
人福く口柄と思ひきんや人持國小  
くふなうひるありとせむにる責人事  
もてつる事うんはあやしく不思議に  
おれぬう人持う人まへみふふに

心うもひ入るあまにらまへしと  
及人むむりああわらひのくきり  
云集むりく忠わうしゆまひもまへ  
そきたうくくけてあうの形まへし  
日比能人をもむりくはむいひうひり  
えまうふふ責やりますりゆうひりか  
うらきくけてららういもてするまよ  
とわつまふらぬ人のさうあとりて口に  
まへあてみつるもろひいふあまあ  
夢れあまわらうてまのくうひまひ

と一老の心は師の心を成して之れを  
きこむべきかやと一思ふもあてしむる  
すぢわらふを真一に心人さるるも  
もく一あふ冬又あふ春一き事とも  
こころいひききる世感ハ酔おき  
志もさまの人のわあひのきりひく  
あきま一とむら流一もあつま一く  
心うき事一乃とありてまていゆりさぬ  
物ともと一とわて縁よりあたる車より  
むらてあやまら一は物おも乃らぬきり

天祐とよろかひゆきてついでにらしとれ  
志す形とにむきてえもいりぬ事とも  
志ら一一年老聖徳のみきうるは師れ  
こころりかこ心なきうてあぬ事れ  
ソひほくも流りまころいとりりゆ一  
あふ事一を一てもこ乃世もは世も  
益あるへまわりさあはけいしハき事一  
叶せまはあやまらわかく財をう一あひ  
病をまうる百薬乃をさけしとあ病を  
酒よわらうとこれいふとわすと以へて



酔ふる人々色よりうきもの思ひてく  
なぐりたる後世世人能く智恵をうきなひ  
善根をやとるし火持こくして悪をま  
ら流津此戒をやつりて地獄に墮  
酒をとめて人々のませうる人子百生り男  
子の善悪は生るとしう佛に脱胎す神  
おそくもまうとおも物あまるとものつ  
たしくまのちもろくし月能く夜宵にありた  
花はもともそし心乃とくに物持しそ  
悪かししそあまれ奥まうしあつりさなる

ほきくなは日思ひにたふなれ入る  
やわをこあひつるもあつりあくまじ  
あまうしそあまうしわ此の蘆乃にらとわ  
所を物みきあともあやうなるるまじ  
しそかたれつるしそあせりま  
まそ火もそ物あなとてつそあまら  
そしひひえわあく乃とつるあまら  
揺乃しわ屋野山なともそあ何れ  
あまうしひえあまらう人かく乃とつる  
わししわうしわむ人あまらうまて

はう乃とるもいとよしとるまの人  
とわちきこいまはうつすまな  
のつまらせうほうちつとまの  
人乃と戸まをひくとなれぬ又  
うけさいいんせと戸のたう  
ゆふさうもの那里辭とつひもてあさい  
志こふおをあるひまあきさるり  
まひくおまらるかかたうた  
もくわいもまあつひいも  
ひきとけひしうふらとわひる  
はう

はう乃とるもいとよしとるまの人  
とわちきこいまはうつすまな  
のつまらせうほうちつとまの  
人乃と戸まをひくとなれぬ又  
うけさいいんせと戸のたう  
ゆふさうもの那里辭とつひもてあさい  
志こふおをあるひまあきさるり  
まひくおまらるかかたうた  
もくわいもまあつひいも  
ひきとけひしうふらとわひる  
はう

鋸乃とらを車につうくわがくちなりとわ  
けまはし庭と志うきて泣き出わつてひ  
あつらわたりためし人用さるうと  
人感あつたの事わけ事いれあるもの  
わつらわつていりーに吉田中納言れ  
りりますおこれういやあつらるる  
乃とまひとわーいさうーわ  
いんーとおもひける籍れとていや  
こまうた事なり庭後を奉りする人  
かりますおこれうとわいれ実也とう

或る孤とつひとも内はふれ此の御樂を  
うへ人ううるとそそ察劍をいその人  
もらひける形とつをきつてそそ  
女房乃中に別殿に幸まけ盡し座れ  
御劍をてこつあまいと志のいやふい  
とりー心もくわきつれ人うとそそ  
なわらるともや  
入来乃御門を暇と人一切御成おま  
六波羅にあらわやけ野とつとろ  
あましてことりー青楊殿を傳へ

那蘭陀寺と考はる所の中より、  
那蘭陀の大門の北にありと江師の説  
とていひけるを西域傳法顯傳の  
にもんじの更に見るに江師のいふ  
才学よりりしれんむつる  
唐土乃西明寺ハ北にありと  
言ふやうに正目にいふるまじやう  
意言はより神泉苑へかて候ふ所あり  
法成就乃池ハもとともやすハ神泉苑の  
池をいふなり

これくは言ふんこれにゆきといふ事  
よつまふらひに似たりは影雪と  
いふたまきこ言といふ事をあやまりて  
だんたのこはりありまき木にまきと  
うごまへしとある物よりりきりり  
いひまふ事よや鳥羽院にまきと  
にりまへて雪あるにうごまへし  
么家より積波のすけり日記よりり  
四條の池に親つらきけといふのを  
信治よりまきとて候ふ所あり

あや—き物まりのやうわしと人お  
さふを安て大おと鯉とりの魚まりのぬ  
ま—あんよ—あまきけ乃志—  
何条事—あんあゆお志—  
ま—ぬり—と—きれ—  
人つ—と—角をきり人—  
耳越きわてその志—と—  
ほ—人をや—せぬはぬ—  
と—人—犬を—や—  
—の是皆—あり律乃禁あり

相摸守町お母—松下此様左—  
守をい—事—あり—  
—あり—  
—小刀—  
—神—の機の外義景その目  
けいめ—  
男に—せん—  
もの—  
—もま—  
—れ—を義桑みおを—

リもりにてやすすりまに候し  
みらるゝくやとうきりて戸を閉ぢて  
尼もほいさじくとちわらんを思つた  
くありりきりさてくあるへきなわ  
物はやわれくるにちり成候理し  
もちりる事なとわき人よ見ありりや  
あ流流らんつああわと戸を閉ぢて  
あつらわらわ世をたさむるは候物を  
ももつてはぬれられた聖人か何の  
天下をならしむ人なるをいふこと

まことにて人なはわらわらう  
城陸奥や恭盛はた志なきものわあわ  
て城のまがさきをみるにあり候うへて  
志なきをゆわとこゆわをうへいそ  
ゆわゆる也やて鞠城をきくをくら  
又是をのりて志なきをけあてぬは  
あつらわらわあつらわのさわ  
くらを志くきり人ありわ怒な人や  
うー田と戸を閉ぢてはるに  
こりきり物なり人乃かありらう

志はくし乃るし馬をいまわらむをみて  
 つよきとらるるしきをふをきるつて次  
 ろつと勸けをにあやうき事やあると  
 みてあらはれりあふりありあふり馬を  
 えすつてひけ用さ成志をさるる業を  
 中なわられ秘發れ事なわらぬ中  
 前代を若人たふひ不徳なり定りし事  
 堪能乃惟れ人なりなわらぬ時あり  
 まきる事ハたゆまぬけりし事ハみて  
 ろろくし金きぬとひん自由な事との

ひろくし女那里親能示作乃るあひ  
 初めは此振舞心けりいしを流るる  
 けりし事ハ得乃もとなわらぬみりて  
 初まきまな事ハ決りもとあり  
 あふりもの子をば師となりて學問し  
 因果代理ともきり説經なりてせむる  
 ころきともせよとソひけき度とつれ  
 まに説經師とならんつあにまわらる  
 業なりしひんり輿車ハもてぬ方代守師  
 流さし人時をけとむらんしをうせ

うんもりくちりまそはなはんいあう流  
ううゆつーと思ふわ次も佛事此後  
さげねとすくむる事あらんよ法師  
そ下に能るきハ檀那すさまじく思へ  
とそあまとりあまをなうひらわ二つね  
わさやうくあひひに入れまはしめ  
とそ志くくわめしてうーあこふ流  
説經なうーあつ勝ねくーあまらわ  
あめ法師乃くあもあひ世男此人あんそ  
あやあわわあかとい流事につけく

方をうて大な流なをもあ能をもつま  
あまあもあんとあまのうーあま  
事すあまはうけねく世を乃とらに  
あひいてうちをこーあはくまうさ  
あうわうる目乃あれ事た乃くま  
月日あまをうれいこくにあす事ね  
ーあハ老ぬ終もあの上あもあ  
あまのーあうに力をまもあひく  
あまのうーあまのあまのあま  
あまのうーあまのあまのあま  
あまのうーあまのあまのあま



この神の一生始らむとありまか  
しん事此中に少くもさきりまきるといふ  
おのひらく入て第一此事は我輩一宗に  
きかひのひすまて一事をまげむ  
一日能くもら一可れうちよしめまらぬもの  
きこえんゆにすこも益れまき  
る我いごふるそのかをいもらす  
大なりをうくつ舞ありつら  
まらとあら流るとわらちば一事を  
あつらひだるの基成り人一人も

ひらくまにきひ人まきまらて小を扱  
大よつくとくまにまらて三枚石を  
すまて十乃石まつる事いやす十枚  
扱二十一のけく事いづらあり成  
まきん門のまらけくつ舞を十まき  
成りまらけくまらてむらくまらぬ  
石まらくまらてまらけくつ舞を  
まらんとまらぬまらけくつ舞を  
まらぬまらけくつ舞を  
まらぬまらけくつ舞を  
まらぬまらけくつ舞を  
まらぬまらけくつ舞を  
まらぬまらけくつ舞を  
まらぬまらけくつ舞を  
まらぬまらけくつ舞を

西山のゆきをその益まきるへき事哉  
忍えうは門より悔してやまへゆく  
つまずき里ゆくまじきろきぬけける哉  
火のひるん日哉そくぬ事あはれ西山は  
事いひつりて又いふおもひごとめと  
おもしろい一時の悔急すありら一生は  
悔急となかうれまむらう一事業  
のあはれおさんおおもひの他の事  
やうな事もつらむつらひ人おあきうら  
まもつらうの事事にくひて

一乃大事成つる人信あまうらむ  
中よりあるのま今のすくまきうわ  
すく事おとつらあわわこのつれ  
ゆきを行つらむらとわらわを  
登道は師より座もゆるりまきて  
つらゆかゝるのりさやあはれ  
かの清きうなるひよこのぬれ  
さうまうんとついでるを  
物りりありやうあう人信  
けまき下れとも信く物あ

人志命を面おも違ふまもまらつものりい  
我を志の聖もうせおい為まてらんやん  
らーいりてくおけくならひはるらわを  
申はくえさるまゆくをありこう  
おわゆ道敷と兼いすありち物ありとう  
論語とつ又も付なはあわひく書を  
りつーとおひひ書ふやうに一大事  
月録をうたひあつわける  
今日ばまのり成なさんとおのりをおらぬ  
ふうきつ先も書てまき違ひくししまらん人

きりりあてこのめぬ人々事わたの  
おれ事いこうひておひうぬをりわ  
おあひわわつりーわはる事ーハ  
いとわてやすらるまきさういとお  
日々に色物あまのり思はるまは似  
つおれいらしうぬいー一生れお  
又志らあわおひておあまーおら  
ゆくしとおあふーいあつたうりぬ  
事もお神をましく物い立うーお定と  
ふらぬまのいまいあつたうりぬ



衆に入てもめくまのり一とらふ人いせ  
らら打らぬ時れものきりりさわさ  
し一もさるるのりさうさしけ連ひのり  
こさうまむすけらるる衆もてしるおん  
衆ハきりりふさあやりな家あうさく  
いとより人衆等しれもさるおがうけさ  
よあハこく物いしる若もしくさて  
安きる用さあぬさうさうさうさう  
の青とこさるさのさまハあささ  
さし一とらふ事一形衆衆もら文一

ましける人おきよけな家あま一ぬさ  
いささ一わさささらさうさうさ  
さる人ハ町もさあぬ物な神はしとに  
さらとけぬさあわさうけさ連ひく  
引けく流しまり一ささき男は日されて  
ゆさる一ぬも衆さう家あまにさあはく  
鏡とわてりか形さほく流ひておさう  
おのり一ささ神  
衆佛も人おさうてぬ目衆まゆわさ  
よ

とく新入孤人をとらりてそ智成るわと  
思ひん更にあつるふらひにけり人れ  
基うりりりりにささくさみあさひ  
しき人信け執事を治る成るを  
その道、智にをより信と定てし治つれ  
た乃ららみ我をそ人志さくさる成見て  
その道すくれらりと思ひん事大なる  
あやまらあらしみまれば師暗證の祿師  
ころひよらりてその道よきらひと思ひ  
とらあつるひをの道り授るあさる

物をみあつるふらひ是非すへらひ  
達人の人成らる暇ハすしあまらるに  
あつるひだるは或人若世にうらも成  
りまらんして人をまらる事あらん  
すあかにまこととむいしてつまたに  
えららゆらんありあまらにうら信を  
たうしてな我あつるりなうらこと成  
ららあらんあり又何とらもむら  
心をけぬらんあり又いさく、覚業あく  
覺たのむもあひこのまらもあつて

夢一ぬうる人あり又海一と  
むねの心も人れり事あるにさも  
あんとてやみぬる人もあり又さきくに  
推し心えさゆり一志一けり  
うらうあけきあけ志うのめさけしむ  
しうぬ人の心もすし一も一あし  
さゆりと思れり新あやまりも  
あはれあや一む人のみことぬるやうも  
あつりらわともよらてわらあ人の  
又うぬえされとも志ゆわともいひ

むねの心も人れり事あるにさも  
あんとてやみぬる人もあり又さきくに  
推し心えさゆり一志一けり  
うらうあけきあけ志うのめさけしむ  
しうぬ人の心もすし一も一あし  
さゆりと思れり新あやまりも  
あはれあや一む人のみことぬるやうも  
あつりらわともよらてわらあ人の  
又うぬえされとも志ゆわともいひ  
むねの心も人れり事あるにさも  
あんとてやみぬる人もあり又さきくに  
推し心えさゆり一志一けり  
うらうあけきあけ志うのめさけしむ  
しうぬ人の心もすし一も一あし  
さゆりと思れり新あやまりも  
あはれあや一む人のみことぬるやうも  
あつりらわともよらてわらあ人の  
又うぬえされとも志ゆわともいひ

足んりこゝに但おやうれきりりわわく  
佛はまゝをなすふりつあつまはあゝ  
或人久我がつてまともわくるに小袖  
おがらちまゝる人本はらわの地蒸う哉  
田の中水にをひひりて移んゝるに  
あゝひんわんえこゝらる福も福の  
男二三人もまそこゝにちりまゝあを  
こ乃人成をいひあわ久我内大は殿  
よてうたりにまゝあをたりにまゝ  
町ハ神女もや人事形ま人をたりにわ

東大寺此神興東の地美えより海産乃町  
源氏乃らまゝをまゝにけ殿大おまて  
まゝをりれまゝをまゝ門お國社乃小  
警々蹕いり付へんとりまゝけまゝ  
阿方此振舞ハ無仗志おり志おまゝを  
まゝわ答おまゝをまゝはり神まゝ  
こ乃お國水心所をまゝ西宮お説を  
まゝれまゝけまゝ眷属お惡鬼惡神を  
おゝ神社まゝこゝにまゝをまゝまゝ  
ありまゝまゝまゝ



禊寺に僧乃くもあつて定額に女孺と  
つし事一交其式のみくすつてす  
まゝまわつる公人能通号より  
揚名外よりきつて揚名自とつしものも  
あり政事要略あり  
徳川に於て宣法下り中ゆつて唐土に呂乃  
國あり律に意あり和國を律に國とて  
呂に音なりと申す  
呉竹に繋りて河竹に繋りて河海に  
ちつきに河竹に繋りてにちつきりて

禊寺に僧乃くもあつて定額に女孺と  
つし事一交其式のみくすつてす  
まゝまわつる公人能通号より  
揚名外よりきつて揚名自とつしものも  
あり政事要略あり  
徳川に於て宣法下り中ゆつて唐土に呂乃  
國あり律に意あり和國を律に國とて  
呂に音なりと申す  
呉竹に繋りて河竹に繋りて河海に  
ちつきに河竹に繋りてにちつきりて

十月流社免於幸其例之振り一但影くハ  
不吉此例なり

勅勅免ふハ勅かきふ作法いまいて  
志する人の一主上は徳愷大くは世に  
さりきと成てふ条乃天神ハ勅  
けらる勅に起きの明神といふも勅  
けらるよりなる神形皇帝將長者員  
勅をそ家ハ勅かき種ぬは人か入  
けり起てはく世ハ勅成はる事ハ  
なありよりわ能人を志しはるなり

勅器ハ起てゆひはる也勅器ハ換  
ふする作法もいまハあきまはる人  
あり

此勅山ハ大師勸清ハ起清といふ事ハ  
慈直僧正よりしめ給ふは起清文と  
ハ事法曹ハ其法事ハ  
聖代するて起清文ハ清きてなるあり  
改ハなきを近代ハ事法布ハ  
又は令ハ水火ハ織をとり入物と  
けりあり

徳大寺右大臣殿後那遠使乃別當此とき  
中門より使廳に評定をこかりれる程  
官人章魚、牛を飼ひて廳にもちこみ入て  
大程荒座にたまゆがたうへ乃ありて  
あまのうらわらふて臥せりわらわらき格  
なわらふて半成陰陽師にもとくはるす  
へきより各戸を父老お國まきりて  
うに分別なり脚あまのうらわらき  
乃ありて人懸弱に官人たましくは位に  
御牛をとるるへきやうありて半をい

ぬにうて臥せりわらわらき  
へきはるわあつて凶事ありわらと  
なんあや一之儀足てあや一まさる町に  
あや一ころりてやうるといつあり  
急山殿えきまんとて地をひきま  
大なるわらわらぬもまのうらわら  
うらわらありわらわらわらわらわら  
こころありてけまのうらわらわら  
勅問ありわらわらわらわらわら  
うらわらわらわらわらわらわらわら

みか人尸を種するに世に一人王に  
とらん奥白居をきくまんは何れとて  
とらんあすく鬼神ハようま那  
とらんむくくハくあかりすらへー<sup>蛇</sup>  
尸をまごりけまが塚をまごりて蛇をハ  
大井川をなうしてくわ受に祟ありら  
煙文なるもの糸をゆめにいりこもく  
うすきにちんて二すらち中よりあふ  
うしく越えこまきひき事ハつてお  
事那里内やうに志ころまハ華嚴院乃

弘梁僧正と来てかをきかせりありハ  
このころやうか事ありいとまきし  
うらりーとくハくくくくとまきそ  
うへくりまもハあふのきかきそ  
とまきむハと尸を水まわするまき人  
うやうか事志のる人ハあんはる  
人か田を編するものうとまげく  
ゆきまにうれ田をくわてとまき人  
けりりーころにえりすくか田をま  
うわくとゆく越えハ編路示あり

ふふうくつとつひけいせうのとも  
そはとくも菊のきこりりある運空を  
僻事せん少くまうの若あはつくるを  
くさくんとさうじひあまのこりりかひ  
おわ——あわこやわ

ふふこきい春れものありとつわついで  
づあるきともさくさくもさくせるおの  
或高言書の中にうらこきなく時招魂乃  
はまハをこなうの以弟ありあまハ野あわ  
百集集れ長歌ゝ雲うらあきあはれなと

ほげけこり勢きわ喚るされこきさまに  
うらひてきこ趣

あ乃事ばただ乃むつうひを流なな  
人あうくも乃地あめむゆんにいん  
いふふ事ありソきうわひありとく形む  
うらひこりき物先わらぬ戯わたりと  
形むつうひ町乃まじうあひやす  
才あり少くこの世へうらひ孔も時  
あしひ徳の里とてさよのあつうひ都回も  
あ幸なる貴集れ羅もこのむへうらひ

珠をうへにありすもやななり奴をさるわ  
 とく形をうへにありしきまゝに事あり  
 人先志をもた乃むつゝひりあひるは  
 物をも徳へゝひにありしすまゝに  
 方知も人をもこのまき神に是あり時  
 よろしくひぬある時ひりみしたるひあ  
 けき度ありしひあはきけきひきりしひ  
 せき時ひりけくひひもちらぬ事  
 まきまきよてきひき時ひもの  
 きりひあひりいしてやあるゆゑに  
 やりりりなる時ひ一毛もろんきひ人を  
 天地に雲なり天地にわきるところあり  
 人は性ありうゑなる人實文ありて  
 きりまゝにさる時ひ我怒をもさるひ  
 物此のありにありしひ  
 秋は月をわきわきりてさるものあり  
 つつとくも月におをさるあまを思ひ  
 ありきん人きむきにむりあはさる也  
 海あり火燧も火越をも時ひ火を志て  
 ときむ事ありりりけよわさるに

うろひつーき神のうろひむらぬやうに  
心えく炭をほむきま那里の幅村内幸  
信東此人淨教をきそて炭をきこき  
けきあるま穢乃人白き物をきこる目ハ  
火着をもちぬるころころひさし  
想夫恋といふ樂ハ女社とて成りある所ハ  
名もはあつたお奇蓮よまれ  
なり晋の王侯大臣とて家もちちす成  
うへてむぎ一町芝樂あり是より大臣を  
蓮有といふ廻忽も廻影なり廻影國とて

えひすれこりき國ありて夷漢一伏一  
後一専わてをのきり國ハ樂を奏せり也  
平宣町別所老れ乃ち母一かごわに  
西明寺入るあるよひれ男よよりて事  
ありにやうとトハ好くひき  
あつてもうきき一ほかに又ほひきて  
並意なるものさうりぬやうある  
ことやうあわともととありーハ  
あへる並意うまくれまうま  
そりにてりーりりげとわさへて

とてつてこの酒をひらわたうへん  
きうくけき中つる那里さうおま  
あふまへいさつまわぬんさわぬへ  
物やあるといつてまへももめあつと  
あわいふ志えきしてとぬくは  
もとの一程もたいふ乃棚もこのけけ  
みるはすきききききききききき  
もとのええきききききききき  
このあん少てあつ流とく教教も及ひて  
無いといふはきききききききき

ゆいりもたまはま

最明寺入る勢、思はれ集光次り、馬利  
方入るはかへまの候をけりりて  
立いり候とわきるにある、まうけき  
うりきる換一献、うらありひ二献、えひ  
三献にりいもらいうてやえぬを座を  
幸至天賜陰弁僧正あり、これ人ま  
坐き候とわきりて、年こしらにたまり  
足利乃ちち物心もとあつ候と中り  
けきいりうりきききききききき



三十あうそ女房成に小袖一てうきせて  
はよほつりされわその町みくる人徳  
ちくくまて侍一りわたり侍一ありわ  
或大福長者のいりく人から後津をき  
をきそひこふるに徳をほくへまぬり  
まうくそへいけるふひなりとある  
乃と成人との徳をほくんとおもひく  
すくくまらそ心ほくひを修けす  
まふと云い他乃事にあふ人男位乃  
おひひは位一くわあもそを親する

事なるは是乃一此用心なるは次より事此  
用をわあふくく人此世にある自他に  
つけく示教を量あり欲し随て心く一我  
とんと思ふく百万乃錢ありとくあ  
志りくもほひくくく示教いやむ寸  
か一財はほく心ありかきうわある財我  
りらてかきわなき教一志くく事  
うくくは心教心にききす事ありは  
我をわらわすき要念きくわくく  
はくくくくくく小要をくあすく



癰疽とやむ者水。あつひてぬりひと  
せんよわい。やまきらん。い志。うに  
うわい。多富。うく。ふ。あ。一。究竟。理。即。に  
ひ。一。大。欲。い。せ。欲。も。似。り。り。

きろ。ひ。は。人。う。ひ。ほ。く。物。也。堀。川。殿。も。そ  
と。ひ。り。福。う。る。あ。一。哉。き。つ。ひ。に。く。り。る  
仁和寺。う。て。東。本。寺。れ。あ。を。も。あ。る。下。は。跡。に  
狐。三。と。ひ。う。く。口。く。ひ。つ。き。げ。ま。は。刃。残  
ぬ。き。て。う。れ。を。あ。せ。く。男。狐。二。ひ。き。を。け。く  
ひ。つ。ひ。ほ。き。こ。路。一。ぬ。二。い。よ。け。ぬ。信。師。い

あ。ま。う。ふ。く。ソ。神。あ。う。う。こ。う。ゆ。い。あ。り。り。わ  
四。條。黄。門。命。を。う。神。て。云。龍。秋。い。乃。う。り。わ  
う。は。や。ん。事。れ。き。え。う。わ。先。日。き。う。わ。て。云  
短。途。え。う。う。わ。き。め。く。荒。涼。乃。事。中。な。神。在  
よ。こ。笛。れ。五。乃。穴。を。終。り。う。一。貴。と。え。れ  
侍。る。し。と。ひ。う。り。に。う。れ。を。あ。ひ。その。あ。を  
千。乃。穴。い。平。調。子。れ。穴。を。下。無。調。也。も。男。に  
勝。絶。調。残。る。う。う。わ。上。雙。調。次。も。鳧。鐘。調。と  
を。き。て。夕。形。穴。黃。鐘。調。也。そ。次。に。鸞。鏡。調。と  
を。き。て。中。夜。穴。盤。索。調。中。と。六。と。の。あ。り。ひ。も

御仏酒ありおやうに問ふにこれ一徳を  
ぬすめるにみれ宛乃とこれ問ふ調子成  
りしひいてきも問をとりる事ひひき  
故小真琴お快なりき神のつ宛を吹可  
ふあひ乃くのけあへぬ時は物あり  
あきうる人うと中貴料第のいなり  
涙も真あり吹連後並成なる吹し事  
はりなりと侍身他日に景茂り中ゆい  
笠い志しつりりきてもちこれけう  
りりなり笛い吹れうりまこれらり

うつちうへりてゆく物なまは宛と  
口侍乃う人に怪骨をくりて心を  
こもみれ宛乃とにおきしひひり  
乃く宛るりりもきうむりひあり  
うけいしつきの宛もぶようひと  
はは連まもあきありし呂律れもの  
うあひらうひのとれとる那器れ失に  
あひらと中貴

何事も通むいあうとくあれとも  
天王寺れ奏樂乃とけらららぬとい

天王寺此伶人能く作り高き此樂ハ  
圖を志くハありきてその祿能く  
ゆくのかり侍りありもすれ  
ぬい子能く山時流圖に侍り  
と心いゆる六時堂能く  
そ夢黄鐘調志あり也寒暑  
あわさるるわろへき故に二月涅槃會  
聖書會までの中一男を指南と  
事也い一調子をもちていつ  
とくのふかあわさるる鐘乃  
黄鐘調ありし是等考克調子祇園精舍此  
無考院乃夢形里西園寺能く  
いふつーあまさだひい  
けしやもあつさるる我を國  
えりしは浄金剛院志鐘此  
又黄鐘調なり

遠治弘安乃ろろいまつり  
はけ物しやうな糸村の布四  
るをばらわておりこまは  
しとこの針きする水干に



本徑此うーりあるにけきしてけま言随羅石  
をい中つるなわさうりまき飛ける

鶴乃おかいとのい童名さうりきあり鶴を  
うい給ふる故ると中い僻事也

陰陽師有京入るりまらさうりわ乃わわて  
さうりまえてきさわーりまらさうり入て

け庭鬼ゆさうりにひらまこと浅きく  
あるつさうりぬことなわなを志かりのい

うさうりさうり成はさむわらみち一御して  
みおさうりけにはさうりわ給へていさめ給貴

まことにすうーり地をもさうりうに  
さうりんこといやくなき事なわらさうり物

樂程おと成うへをさうり  
多久助り中ふる道無入る樂此の中い

奥ろ事とともさうりえさうりひていさけ祥師と  
さうりなる女よをさうりてまらをさうりわさうり

水干のさうりまきをさうりせ鳥帽子をひき入  
さうりさうりおとまひさうりさうりさうり

むすめさうりつりとさうりひさうりさうり  
是白拍子乃振え也佛祓はな振えさうり

是白拍子乃振え也佛祓はな振えさうり

そ乃ち源光行むりく孤こも成はくわり  
後多羽院法徳作もあむ趣著もそへ  
さき終むるも

後多羽院法徳 時行法亦日行長誓百  
かまきありるる、樂音乃内倫義の處  
めきれて七徳舞をやろ志きこりけき  
ふ徳れ冠者と異名成けき、るるを  
うまきことり、くやむと捨て道世志  
けるを蒸穂和高一藝あるものこ、下部  
まてしめ、をきてふ便小きせけき

此信濃入るを扶持、給くわけけ入る  
平赤乃物徳を伴りて生佛とつひる青目に  
をへて、こせりわさて山門を  
こくにゆく、くかきわぬ席判友、事ハ  
くり、々急て、貴のせ、り藩の冠志の  
事ハ、こく志、さりるる、やむかくれ  
事、を志、り、も、さり、武士乃事、らる、は  
わき、生佛、東國、れ、もの、まて、武士、よ、こ  
き、て、て、く、せ、ら、む、被、生、佛、の、ま、つ、ま、れ  
勢、を、と、給、ひ、は、師、ハ、ま、あ、ひ、る、な、り



六町襖襪ハ法然上人此弟子安樂と云ハ  
寺の僧徒又とありて造て勤よと云わ  
そは夫秦杜善觀坊と云ハ僧中一念の念佛ハ  
完初也後嵯峨院此四代より一まわり  
法ハ續し觀と善觀坊と云ハあり也  
今本乃釋迦念佛ハ文永此より始め輪上人  
是を云々云々云々云々  
よ貴細工ハすすすすすすすすすす  
いハ妙觀リ刀ハいハいハいハいハ

不條同裏まけまけ物まわらむ故大御殿  
いハいハいハ殿上人とも云らるると云  
基と云らるるにみす哉くけてらる物  
ありたすと見むきこれハ瓶人此やうに  
法計めてさす乃うきとるをある瓶よと  
とよまけてまらひよけよとわ未練乃瓶  
まけらるる云々云々云々  
その別當入るハ内うたき庵了老なり  
ある人のもとよりソハハき鯉哉い  
うらまは神のみか人別當入る乃庵了を

見りやと思へたうやするらりいでんも  
ふりくとたぢひけるると別當入たさる  
人かくけ程百日醜醜をきわゆるをとり  
おきゆるきりにあひまけてうらうらんと  
きうきうらういんくはきくくくく  
ありて人少も思ひらるとあは人少山北  
方政入道殿にかつわうされさわけは  
おやうれるくはの道にうらうら  
お月ゆるあわきわめく身人あは  
きんといひきんはな我あわあん

何条百日醜醜をきんうとろくまひ  
くわくわくくわくくくくくくく  
おふ家いもわくくくくくくく  
よわも無あくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくく

ありけん定むるひ勝負はまけりさり  
ことほげなむるむら

すつて人ハ世智無能あるハまのなる  
あふ人乃子此見所まなとありぬり  
父乃あうて人と物つとて史書れふを  
のきこりさりとくきさるるも  
も者おあうてハ所はゆも受くも也  
又ある人ほりてよては法師お物済を  
きん少く毘毘成りてをさるにあられ  
ひつむらこりしりハばらわてほげると

ゆふある男此中一にありて  
見ゆかりうらまきいさくお柄ありや形も  
ゆふとらけけめをたすこりひえあそ  
ひくもまうて法師此ひをそ沙汰あも  
まよりぬことなる心えつるより  
まどつるつるつるわ貴ひさくれえハ  
ひの木のやひひてようめ物よあう  
ある人徳らけりわ貴人ハすうこれ  
事さるるみわ流とみゆる也と法師れ  
とらあしとおもりくなまことあも

まことありて人をあはれはくやく  
こゝに祭すくならん人はきり男女  
老少みかざる人よりよけ進みこゝに  
わらうをならよき人死ともうるりまは  
わす神ごうくおひいほつるくものなわ  
とつ乃とりハな神つるあまにとまうき  
ふえふがやうたへ人をあいに一後  
するはあり  
人信物をとひつるにちりひもわし  
わりのまたいりんハおこ

心まことひやくやうにくりこゝる  
ようぬ事一那里きりこゝるもな  
きつらもと思てやとらん又まこと  
まぬ人もなまらんうらうら  
ひいきるせらんはがあをき  
あま一人ハいままをよるぬ事  
わらきりうまきりまもて人死  
あまきりまをまらりソひやり  
いあることのあるはうとま  
といもゆるうあつまあ

うりぬるふとよもよものつゝきこもす  
あつりもあつりむあつりぬやうに  
はげやとらんあつりぬ事りい  
かやうれ事りいものあつりぬ事り  
ぬあつりぬ事りいぬあつりぬの  
まゝに入らるる事りいぬ事りい  
ぬあつりぬ事りいぬあつりぬの  
物し人けりせりぬ事りいぬ事りい  
つわすこなたまな事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい

こつちらな事りいぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい

丹波よつちもあつりぬ事りいぬ事りい  
うつちもあつりぬ事りいぬ事りい

なまうしーとらやきるふな神ハ秋乃うら  
聖海上人そのかりも人あまのききひて  
ひきけつも雲たりにいりいりいめさ  
せんやそくしーしきつるにをのく  
おきてゆくし信たうしわいあな家  
獅子こまひぬえしきてうし海内まに  
うらうあけまは上人のんしき感て  
あふうそやうの獅子れうらやうし  
うらうしきゆんあんと海くうえ  
うら殿原神勝の事ハ山流うらめしや

無下なりとくしに若あやしうまこと  
他もことあわらわ初めはとにうらんと  
うらも上人のゆしうらわてむあし  
ものきりぬきりかしうら神宮をよひて  
けい社の獅子けえしきやうさう見て  
なうしひある事に侍らんちとてうら  
いし神けしき事ハ作さり形あわらん  
とのけしきまうらうら奇怪ハ作事也と  
さしうらわてすんあしうらよけま  
上人の感海うらうらにならうら

やあいなこりすゆりものハさきさ梅  
よこあま物もさるるまや巻物なとけ  
うてさしまにまきて本はありひよわか  
ひひわれとをてゆひ行くすくむし  
だてさまにまきうる等うあをひより  
三條右大臣殿おれま動解由小治れ  
家北能書代人くわいあももだてさ梅  
まうるる事ありあひよこあまに  
すくられゆき

流随力近交り自續とて七ヶ条書とくめ

うる事ある皆馬籠さるるこもあま事れ也  
うれだめと忍ひて自續乃事七あり  
一人あまのばましく花見ありきしに  
元勝光院乃造りてあまのれをさる  
志しるれ見てて一なるをさる物あり  
るううもさるるさるり一尺形ハ少く  
立とまらうた又るれをすくむるあま  
るれひまきうてあまの人泣き流中少  
うろひ入る流とあまあやまうさる  
うも成人みか感じ

一高代のまゝ坊より一まゝあはれ  
百里小浜殿のふありに瑠川大納言殿  
程儀一程一西河うしへありありて  
まゆりより一小備語乃四五六紙巻を  
とわひろけ終ひてたぐいま西河うし  
むらさき此あけうりのををまらむと  
つら文を西河うし終らざる事一何事  
ゆかを西河うし進出西河うし一かさ進ぬ也  
程うまひきみよと作らざるもまじ  
なわと作らざるも小の乃巻終らざる

程は倍と申より一六あまう程一水へ  
かまひを程まわりの事一見と  
つら事あはれ一終人一いさくり此  
事をもいふ一く自讃一うるなり  
後鳥羽院北の哥一袖と袂と一首の  
うらまゝ一わあんと定家一  
うらまゝ一わあんと定家一  
秋乃野志草此たもとりたあすくま  
かよひてまゝ一神と君ゆらん一は  
何事うたゝ一ぬと一と一と一と一と



寸のあがりて本号を覚悟のなれ其加也  
 言運なるかなんともくくくとるる一とこれ  
 ゆるかあるの糸お國伊通のれ款状おも  
 ことある事申の身題目ともくすきのせて  
 自讃とてこれなり

一考互光院は片手種か款の至意御光  
 系あり行房の伝法書一とていへるに  
 うつとせんとせしにをり乃入る  
 かの草一とてわひそくみせたり一に  
 花はかよふ文哉とこれ一聲一百里一

きこゆとて一と句あり陽唐韻とてゆるに  
 百里あやまりしと尸一なり一とて一とて  
 みせうてまつわけるもの建り言名也といふ  
 業考これもと一とひやりさるにあやまわ  
 ゆるわ款ゆとあをさるる一ととて事一  
 得りま款行もいふあるへ事ありり  
 款歩心りむあつるなり

款りなる我ふ志人数ハ四ふ形り  
 種心ふ歩不幾なるわ一とともくま一  
 ゆるかてん流あり

一人あまゝともあひして三塔巡礼乃事  
侍りに横川乃寺於堂於之龍善院と  
しけるる寺額あり依理行成れあひひ  
えつうひひていま決まひとつて  
つりと堂僧ともくくつりて成  
あはばくくきまづ依理あはう  
りきまづつひひてつりて  
堂内より出れ果ていふせけなを  
えまきまのうひてまのく見侍りに  
り成位署名字号きまにみ侍り

人みか真も入

一 那蘭陀寺より為眼ひく淡衣き  
い災と云事をわす神てこれやわ  
物光のひくを亦化之形おれきり  
はわの乃内よりわくまといひ  
うまはくく感侍り

一 賢助僧正よりともあひて加持香水を  
み侍りに心まきまてぬわくに僧正  
之わて侍り陣地あまき僧正  
は師ともをくてもあさするに

がみしあまなふ天流わかくてえせあ  
あつひとつひくじとひきしとて  
つそくわい城あおわひしとせせああ  
おつをよといつわいにくわ入て  
やうそ金しとつそあ

二月十八日 月あり 参敷もちうけ  
午奉流すにまうてくくし流より入る  
ひとわりわあうくわうて種すし  
ゆいに徳なる女はひひるし自ひ人と  
群なるりあを入てひきまぬりくまは

まひひなともしうつるしりあ連ひひん  
あしと思へすりりきうらに彩ぬらわて  
あしとさ海あしとらぬあらある  
あしあま流うるき女房れそくろくと  
いりわいつそにむせと色ぬ身人な  
おりしとわとみおととそまはる  
とそあんありあまけなりとてえん  
とそまはる人なるあとのまひあ  
とるあしとるまうあし流えはしと  
あしやまぬこの事はまきとゆいハ



あひしつりんよりほききぬことの業  
もくもあつめすつてまに此人鬼少なり  
まうあひしつりんうてく心ほきだきしと  
むかふるへしよあめあしんよつけくも  
まふらつりみよくとしもけなん  
男いかくあや—身力乃ふにあつて力成  
しつらにあきんやりと人もあ流をとり  
せつわつちかひむひぬさつんもつけ  
まらつ—とたわしあんいとこつあひ  
あつ—あむめ乃さふらつり—まねは

むかふる月になくすくみくきつりつれ露  
わをいしん在明おつちわつちあまに  
志のつらつちもなつん人いさつら  
このまきんよハ志—  
りら母おまともなな事ハ志りつちえ  
ほきひやつちけぬあ流とくめぬ人ハ  
一衆中になまてつらつあまもみぬもや  
あん痛ハおらるもほするひまあく—し  
死絶すてにち—ささともひま病  
急あつ死もあつちつちりあつハ志ほ

平生此念もなほひて生れ中にむかひ  
こも我闕して乃ち志つたに之を修せん  
朽りし病をうけて死門よりむむ時  
亦一事も成さぬしういなきく  
と一昨日悔急を病てこのさひり  
あざりて命成ましくせし我を日に絶て  
け事かのをしをこころに闕してんと  
形をおこすうめとやりておりわぬま  
ふれあもあはれはとわみく  
つらうひのうめうめけり  
ま

くくなきこころをくく  
いままありてなよむりんと  
つらうひの如幻乃生れ中に何事なりあきん  
すては形皆あねなり亦形心にきく  
あ心迷乱ひと念て一事もあすつら  
重し美事を下して道にむむ時  
ぬく亦作れして心身なり  
とうあんに遠くは  
ひとく一苦樂ありああ樂と  
このこをひる事なりをむむ事

やむ可なり一樂欲するると云一と名有り  
名よ二種あり行徳と才藝とのかまき也  
二つは色欲三つは味なりと云ふ此縁のひ  
この三つは志のひこも顛倒乃悲しくり  
たつわてきこもく此わつとひありと云  
きんんは云

ハヨあり一宰父も問ていりく佛ハ  
いある物あり佛と云ふ父のいりく  
佛は人ほありある形ありと又曰人  
何とて佛ハ成は成境と父又佛乃

と云ふによりてある形と云ふ又と云  
て佛あり佛をいあると云へ佛と云  
と答うも又云佛乃と云へに云は  
成なりと又問を云へんめ佛と云  
一乃佛ハいある佛あり佛けるといふ可  
父空よりやうあり人云ふわききんと  
ひてわつとひほりて云へん  
云の侍つと徳人よわつて真一奇

